

# 言語を記述するとは？ —Wittgenstein の言語哲学の展開

入江 俊夫 (Toshio Irie)

東邦大学／東京医療保健大学／千葉大学

本発表は、『論理哲学論考』（以下、『論考』）へ結実する前期哲学から、『哲学探究』を含む後期哲学に至るウィトゲンシュタイン哲学の展開過程を追跡し、その一貫性と転換点を特徴づけることにより、彼の後期哲学における問題の扱い方を明らかにするという研究の一環である<sup>1</sup>。今回の発表では、ワークショップのテーマとの関係で、「言語使用の記述」というウィトゲンシュタイン自身による自身の哲学的営為の特徴づけに着眼する。

日常の記述—例えば、台風の進路や裁判の様子の記事—は、記述されるものと照合することでその正しさを問える。「言語使用の記述」はこうした記述とは異なるとしても、その正しさは問えると考えるのが自然ではないだろうか。しかしながら他方で、ウィトゲンシュタインの哲学は「哲学的テーゼ」を立てない、という点に特徴があるとしばしば言われる。とりわけ、米国の新ウィトゲンシュタイン学派はこの特徴が『論考』の本質的特徴でもあったと強調し、近年、ウィトゲンシュタイン解釈界限で大きな論争となった。だが、この特徴は、哲学的問題はあたかも一種の病気のように、解答を与えられるのではなく単に解消されるべきものだ、ということの意味するに尽きるとすれば、理論構築を目指す哲学者にとって魅力あるものとは言い難い。他方で、例えば、有名な「意味の使用説」は、狭義の哲学者以外にも多大な示唆を与えたテーゼではなかったか？

こうした背景—特にウィトゲンシュタイン哲学の拡がりという関心—から、本発表では、言語使用を「記述する」とは何をすることであるのか、という問題を扱う。その際に、ウィトゲンシュタインの遺稿全集の出版（2000年に完了）以降、最良の遺稿研究の一つといえる、O. Kuusela の *The Struggle against Dogmatism: Wittgenstein and the Concept of Philosophy* (Harvard University Press, 2008) を参照しつつ考察を進めたい。

まず、言語使用を記述することは、先述の日常的な記述と異なり、文法的規則を提示することであるといえる。だが、この規則の身分をどのように考えたらよいただろうか？ Kuusela が批判する Hacker にしたがえば、この規則は、現実の言語使用を統制する規則のことである。しかしながら、問題状況を生み出す多くの場合、言語使用の **agent** は明示的な規則にしがっているわけではない。それゆえ、この規則は、**agent** が暗黙にしがっていた「規則」を「そのまま」明示化したもの（\*）と捉えるべきであろうか？ このことの内実はそれ自体様々な意味で問題であるが、今回の考察における対立軸からすると主題ではない。それが意味することが何であれ、そして、考察する者が **agent** 自身であろうが、傍で見ている「意味理論家」であろうが、このことは実際の規則についてのテーゼを立てる

ことを含意することになる。「痛み」を例にとれば、一人称で用いられた場合は痛みの表出となり、三人称の場合は一定の振舞いを規準とする事実報告となる、といった「ウィトゲンシュタイン的」テーゼが出来上がることになる。(そして、このテーゼは、日常言語の規準に依拠して哲学上の問題を扱うといった解釈につながりやすい。)

これに対して、Kuusela は文法的規則を、記述されるものというよりは、「記述の方法 (means of description)」と捉え直し、我々の語の使用を見渡せる (übersichtlich) ようにする、という主題と関係付けて論じている。その論述は、基本的に、後年の Baker<sup>2</sup>や関口<sup>3</sup>が切り拓いた読み筋を、遺稿から取られた豊富な材料を駆使して肉付けしていくものといえる。

本発表では、Kuusela のこの論述と Hacker に対する批判を扱い、最後に Kuusela の論じている、記述の正しさをどう考えるか、という点について考察する。そして、先述の「意味の使用説」のような解明的言説は、通常の意味で正しさが問題となるテーゼではないものの、我々に積極的な示唆を与える、(※と対照的に) ある意味ではそれまではなかった新しいものであることを論じたい。「我々は、例えば、「考える」という語の使用を記述する、という課題に対する準備がまったくできていない」(『断片』第 111 節) ところから始めねばならないのである。

---

<sup>1</sup> 本研究は、公益財団法人風樹会の助成を受けた研究成果の一部である。

<sup>2</sup> G. P. Baker. 1991. “*Philosophical Investigations* section 122: neglected aspects”. in R. L. Arrington and H-J. Glock eds. *Wittgenstein's Philosophical Investigations: Text and Context*, Routledge, 35-68.

<sup>3</sup> 関口浩喜. 1996. 「展望とアスペクト ——ウィトゲンシュタインの Übersehen 概念をめぐる」。『哲学』47, 256-265.